

教育家が出現し、大慈大悲心をもて疎野極まる風俗を土地と共に開墾し、もて文明の恩澤に漏るゝなく、愈々皇恩の有難きを山間幽谷の部落寒村に迄も浴させたいと夙夜熱望に堪へぬので御座います、思ふ儘を長く申しましてさぞ御座き苦しう御座いましたろふ左様なら。

流水日記

小林雨峰

古き日記なくりひろげたる折、ゆくりなくも東奥の粗行ありたれば、反古袋に埋れ去るも雞肋の情すてかたく、しるして、予が會遊のあとを追はん料としつ見ん人其の心してよ
春はくれて都は、既に、大久保の躑躅花咲くと云ふなる頃、われはまた東奥の旅客に上りぬ、遊心勃勃として、向はぬにすでに心は遠く東奥の空に向へり

愁を掃ふには旅より外にもの、具なしと嘗てより思へるわれは、今尙ほ此が爲めに身を東西に任すとのいかにこよなき樂みのこまれる、況んや再度の閑遊のそれなるは更らにうれしく、白鷗浩蕩の趣もものは、行く春の落花を趁ひ、流れゆく水にまかせて奔りゆきしは夢見る心埒すと云ふも愚よ、

途すから目に映つりし沿道の景色は、霞浦の春靄、曉より次第にたち籠めたるが、なかに人家ちらりほらりと見ゆるをかいまみて、愈々北に入れば、水戸こそまづなつかしく目に入る、仙波湖の漣波眺みて、芳草若やかに生ひ出て、東風に靡き、對岸の樹木蒼朧とし立ちならぶ、城址の牙城、今に昔の俤を宿し、義烈兩公盛時もいと思ひやらる、

常陸のはて東北の方、瀛車海岸を縫うて奔る、
 今、大甕の晩櫻は花盛りに開きて、そよ吹く風に
 ちりかかりて、結の窓を撲ちて、坐に入る風情も
 云ひ難し、かくては更らに怪松の亂濤奔波に咽ぶ
 趣き時には耳に入るなり、菜圃の黄なる、麥隴の
 青と送迎に違もなし、助川は海岸を去る僅かに十
 數間、目に入りしほどの風色のしばし厭かず、都
 人士の口に嘖々として、此の地の景色の稱へらる
 らも無理ならず、岸頭一帶古松梢を交へて、盤蟠
 縦横、西北の方、峯巒重疊屏の如くに遮りて、海
 波脚下に躍る。若し夫れ潮水曲灣の間に落ち來
 りて、兩崖劍の如く相擁して挾むところ、龍蛇の
 影かたまひ斗りに松の垂れ舞ふの彼方、洋々と
 して、涯なきの大洋を見るべく、人家崖腹に比べ
 る、宛としてこれ屋梁海に臥するの概ありとや云

はん、

更らに曲折幾數回、身は隧道をくゞりて、海
 を出て、は山に入り、山を出て、は海に臨みつゆ
 く間、直ちに見る、雲烟糶糊天と際なきの處、鳥影
 髣髴として掌上に來るの時、古祠其の頂に現はる、
 天姥山と云ふもそれなりしか、正午の頃、勿來の
 關址を過ぐ、古へならば、駒とめて見まほしき、
 古關の櫻花、遙かに眼を山の北方に配る、奇景に
 加ふるに、歴史の影を以てす、右に海あり、左に
 山あり、花や語らずと雖も、心々に動かざらんや、
 五分停車の短きを恨みぬ、
 浪江につきしは、午を過ぎて六時頃なり、此の
 街、大方は舊正月焼けうせたりとして新築の家、造
 作ととも、整はぬさまなり、細き流に架せる幾世
 橋を渡れば、間近に小高き陵の上に聳えたる門あ

り、石階のあやしげなるを登りゆくに、突如中程に友なる人の妻、瑞雲女史のきみ出て迎ふ、家に入りて、此夜早く寝ぬ、

去りし年の夏は原の町在なる、新田の里に住めりし友の今年はこゝに移りてなるか、風采もいと變りつ、思へは居は心を移すとの理りに漏れぬものやなど考へ來りて、夢圓かならず（五月廿七日）

早起、庭の面に出づ、こゝ小高き陵なるに加へ、古木生ひ茂りたれば夏の日の涼しさ、秋の夜の月の景色も思ひやらる、木下に憩ふて木の間がくれに彼方眺むるに、二枚三枚の田の面を隔て、西は浪江、南へかけては幾世橋、町と村とを合せて一目の下に集まり、直ちに名も知れぬ、畝くしたる青き山々を仰ぎぬ、東の方陵のつゞける端は直

ちに大平洋に接するなり、少しく陵より南東にふれて杜と杜と並びたる間々に、松の樹のぼさ／＼と見ゆるがまた朝靄にかゝりて、うつすりと見ゆるところ、狩野の繪筆もて描きたるが如し、其處は棚鹽の海岸なり、今わが憩へる處の立木は、七八百年來の樅木にて十かゝへもあるべきやうにて、枝は地を匍ふ程に垂れ擴かり、根は地上を廣く幾條にも疊み細れり、古堂前の晚櫻一株、名残の春を留めたるもゆかしく、ゆづり葉のちら／＼と落下する始めは三葉四葉さては雨の如くなるも趣いと多し、

鐘樓の下に行みては、浪江町の火事ありしときこの樓に上りて鐘を撲つに、凄慘の狀堪えかたぐ、加ふるに風強うして夜を徹する迄止まざりしを、救済の爲めに奔走したる事、なぞ、佐々木氏の談

をき、つゝ、更らに脚を轉して、藪蔭の小路を傳ふて、相馬家の廟所に至る、路に咲ける椿、山吹の花さわだちて、目に映しぬ、苔碑幾基、風雨に暴されて、昔日の事思ひやらる、唯夫れ、椿の花、山吹の花、くる年毎に、此の墓畔に開き、開きては落り、落りてまた開く、春秋幾何を重ねやしらむ、情なき野花と云ふなかれ、心なき草木と云ふなかれ、われはこの石碑に向ふて昔を偲はんよりは、この無言の野花小草に對して生ける教訓をさくなり、

忠臣の君に捧ぐる古へ人の魂はやとりてこの野花小草に籠れるを見ずや、思へ世の人の名を知られんとしてはあせり、譽を得んとしてはもがく、人は名もなく譽なくも、人の務むべきを務むるすべあるなり、見よや、今の人、名の爲めに生ける

人の其人一たひ去りてば、其名また消え去り、譽の爲めに生ける人の其人一たびわらずなりては、其の譽また存せず人に知られずあらんとも山家の椿、藪の山吹、なき人に仕ふる心のけたかきを見ずや、不朽の命は名と譽とには宿らず、朝三暮四の人に示したきは墓畔の野花なり、藪塚の小草なり、

家に入りて北座敷の陰鬱なるところに獨り物思ひに耽る、庭さきに巨石あり、相馬侯伊豆より持ち運びしものなりとか、山にあるのとは違へり、竹垣に苦いたく生へり、白髮毘布と云ふやうの襦をまとひぬ、きけばこの垣は十三年程も結び替へぬものなりとか、寂ひに寂ひ、かつや海風に暴されたる爲めと知られぬ夜、海岸より獲来りたる防風といふものをした、かに馳走せらる、(廿八日)

朝、裏坂を下りて畑道、田甫を東へ〜と向ふ、
 願みれば與謝山より東へかけて屏風の如くうねう
 ねしたる丘陵の今や青々したる、若芽しげりにし
 げりて見ゆる、竹藪の箒のやうにぼう〜したる
 なぞ、はえ多く、田は漸く種下ろしたる斗り、中
 には早苗の芽、粟粒ほどに出てたるも交はれり、
 鳥追ふ案山子の無恰好に蹲せるも可笑し、彼方の
 杜には太鼓の音さこえ、幟なぞひら〜と翻へれ
 り、きけば今日は妙見の祭日とか、後より追ふが
 如くに來れる二人の兒守の俚歌の聲やう〜うた
 ひつゝ來るにふと耳を傾く、次第に聲は近くやが
 てしるくも左の如き聲はさこえぬ、
 なんだ太郎七豆腐は豆だ、あやめ團子は米の粉
 だ、ね〜と聲上りの聲またゆかし、棚鹽の漁家三
 五、網結ふ男の子の巧みに糸をあやつるあり、濱

邊にはありかちながら、わか心を牽くと多し。
 松生ひし波打つ際に出づれば、脚もとまで渡は
 どぶん〜と來る、寄せてかへす女波男波、凝視
 すれば身は波と一つになりて消ゆるかとも思はれ
 ぬ、鹽焼く家の三角形せる茅葺きの家根の地に据
 えつけたるが如く、匍ひつくばりたるがありて煙
 も上らねば、家根の中を覗き込みたるにうすくら
 く心地もわるく鹽糟の底には別に鹽水もあらず、
 高きに登りて海洋を眺む、海ます〜濶く、空
 いや〜涯りなし、寄せてはかへす波の花ゆらり
 ゆらりと見ゆる木の葉ま帆舟、心は彌が上に爽か
 になりぬ、海限れる松原を隔て、突き出てたる、
 象の鼻の如く長く延びたるところの岬を望めば曇
 れる爲めにや、樹影おぼろ〜しく西へかけて遠
 く消ゆるが如くになり、近きあたりの山は次第に

濃く青く見え来る、こゝに古き祠あり、詣つる人のありやなしや、おはれ灣頭の古祠同行の人語るやう、この丘は東へ五十間程擴かり居りしが漸次海水の浸蝕するところとなりて、海と祠と隔たるを僅かに數尺となりぬ、自から知りてよりも既に數尺は潰飲するに至りしなりと、わゝ桑田碧海の感、豈に自然界の事のみならんや、

坂を下りて戻り途となりしに、空はいよゝ曇りて風聲薄寒を送る、顔は冷き手にて擦らるゝ様なり、兩中人は去る海灣のほとり、詩趣また多し、

(廿九日)

平和と云ふものは、夢の世界より外には求めらるべきにあらざるものか、而も世は變化多く、遷移常ならぬこそおかしけれ、夜來の小雨は強くもならずして、心も安らげく寝ねたりしが、朝また

き、ゴ〜と云ふ聲に驚き目さめぬれば、晴る様子\nのなきのみか、風はヒュー〜と吹きて樅の葉バラ〜と舞ひ落ち凄まじなんぞ云ふ斗りもなし、安藤氏東京に歸ると云ふに見送りて浪江にゆく、風益つよく、帽子をシツカリと押さえて路\nによるめきつゝ進む、おかしき姿自からながらくる〜めぐるゴム人形の如く、漸くにして安藤氏瀛軍に乗りて歸る、また踵を返へして幾世橋に向ふ、途すがら左手に見ゆる寺の屋根を見るに船の揺ぐが如くに動き四脚門の鐘樓は揺れにゆれ、殆んど倒れん斗り、何處より吹き飛ばされ來りしもの\nにや、茅屋根の一片ころ〜と轉げて小流の中に落ち込みたるも可笑しくまたわはれなり、屏垣の類見る〜壊れ倒れぬ、後方を見るに砂煙渦巻きて舞ひ上り大火事の様見るが如き心地しぬ、

かかしかりしは吾等幾世橋に向ひて歸途を急ぎける折、町の外に四十格恰の男の立てりしが、つかくと進み來りたるに、やがて佐々木氏の肩をハタと撲ち、ぐすと笑つて立ち去りぬ、元より狂人のそれにてあれば、言葉もなくして過ぎゆく、何處の者としては知るよし更らになけれど、何狂ひてか、失望の果てか、苦痛の爲めか、遺傳か、特發か、親の爲めか、妻の爲めか、原因はしらねども、不幸なる男の子の身の上深き経路は盡きがたきもの籠れるものあらん、

寓に歸ればこの大風の最中に小高の町、火を失して大方焼け失せ、負傷者、即死者など多く出てたりとの噂(卅日)

京に歸る心急がる、出て立ちてまた東西南北の人となる春風暖を送ると雖、落花また心を動かす

もの多く、旅情綿々として盡きざるものあり、(五月一日)

